

滋賀

SHIGA

# あす瀬田川 東大対校ボートレース

## 京大OB 手作り中継

スタートからゴールまで、3<sup>+</sup>余のボートレースの一部始終をビデオカメラで追っかけ、ライブ画像を観覧席に送る手作りの中継システムを、京大ボート部とそのOBたちが作り上げた。20日、大津・瀬田川である東大との対抗戦で初の実況中継に挑む。OBの応援のボルテージが高まること請け合いだ。

(浅野有美)



京大と東大ボート部の現役、OBが参加する「京大・東大対校競漕大会」。最長3200メートルのコースで、9人乗りの男子エイトや5人乗りの女子クオドルプルなど11種目で熱戦を展開する。今年で61回を数え、両校の総長も駆けつける伝統の対抗戦だ。京大応援団は瀬田川沿いのボート部の艇庫屋上に設けた観覧席に陣取る。

艇が勢いよく飛び出すスタート、途中の競り合い、ゴール……。見どころはたくさんあるのに、観覧席から見られるのは目の前を通るわずか10秒ほどだ。「レース展開がわからない」

レース完全中継の実験を重ねるプロジェクトのメンバー——  
大津市蜷谷

## 知識・技術・人脈結集 費用50万円

「選手の表情が見たい」。そんなOBの声を聞き、それではライブ中継をしようと、京大教授の前川覚・ボート部長(61)は思い立った。プロジェクトへの参加をOBらに呼びかけ、集まったのは通信会社や映像技術専門の大学教授ら約30人。昨年11月、「京大ボート部WiMAX中継プロジェクト」が始まった。

作戦はこうだ。橋げたに5カ所、艇の伴走船に1カ所カメラを取り付ける。撮影画像は河畔の観覧席に設置するディスプレイに映し出す。テレビ塔など中継基地を経由するテレビ局と違い、ハンディカメラの映像をパソコン経由でインターネット中継する。

データ通信は、ボート部OBが勤めていたKDDI系「UQコミュニケーションズ」が技術協力した。無線LANを発達させた次世代高速通信技術を使用。屋外を移動中でも高速、大量のデータを送信することができる。

映像技術はオフィス家具メーカー「イトーキ」元会長で、ボート部OB会「濃青会」の伊藤七郎会長(79)が尽力。映像部門

の専門社員を送り出し、同じくOBの京都産業大の蚊野浩教授(50)とともに機器の配線を整えたり、画面が鮮明に映るよう映像処理したり、腕をふるう。ディスプレイの調達は、前川教授の大学時代の同級生が勤める大手家電メーカー「シャープ」が引き受け、46型の液晶ディスプレイ3台を無償で貸し出してくれた。

プロジェクトチームは5月から毎週土曜日、瀬田川で中継の実験を繰り返し、精度を高めてきた。チームを統括するOBの中村陽一さん(61)は「みんな一生懸命、試行錯誤を重ねてやってくれた。自分たちで中継のできばえに充実感がみなぎる」。

プロジェクトにかかった費用は約50万円。「OBの協力がなかったら、200万〜300万円はかかったでしょうね」と、前川部長。「臨場感あふれるレースを多くの人に見てほしい」と、OB以外の人たちにもレースの参観を呼びかけている。大会の詳細は京大ボート部のホームページ(<http://www.diw.a.ne.jp/~rowing/>)。